

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 アラビア語チュニス方言の否定とモダリティ

氏名 熊切 拓

本研究の対象となる言語であるアラビア語チュニス方言は、チュニジア共和国首都チュニスで話されている言語である。この方言を含む北アフリカ、エジプトなどのアラビア語諸方言では、一般的な否定文において2つの否定要素が共起する共起否定が広く観察され、これらはチュニス方言においては、否定辞 *ma:-* と *-f* という2つの要素として現れる。本研究は、この2つの否定要素のそれぞれの働きを、統語論的観点とモダリティの観点から解明することを目的としている。

「序論」では、本研究の目的と概略を記したのち、本研究において大きな役割を占めるモダリティの定義を行い、これを3つの類型（命題的モダリティ、事象的モダリティ、談話的モダリティ）に分類した。さらに本研究の全体を概観し、主要な用語についてまとめた。

アラビア語チュニス方言は、他の多くのアラビア語方言と同じく、フスハー（古典アラビア語・現代標準アラビア語）を高位の言語とするダイグロシ的な社会で用いられ、さらに他方言とも恒常的な接触状態にある。そこで、この言語について論ずる上で、その言語的環境の来歴と現状を理解することが不可欠となる。「第2章 チュニス方言の言語学的定義」では、アラビア語史、アラビア語方言史、方言地理学、社会

言語学の観点から本研究の対象を、チュニスに居住する大多数のムスリムによって話されている言語であるコイナー・チュニス・ムスリム方言（以下チュニス方言）と定義した。さらに、本研究で使用する資料と筆者の研究履歴について述べた。

「第3章 チュニス方言の概略」では、この言語の文法を音韻論、形態論を中心に概観し、本研究において特に重要となる主題と主語について定義を行なった。

「第4章 チュニス方言の否定の全体像」では、本論文の対象となるチュニス方言の否定について、主としてフィールドワークによる資料を用いてその全体的な統語的記述を行った。この言語には、ma:- と la:/la:- という2種の否定辞があることから、その否定を ma: 否定と la: 否定に分けた。このうち ma: 否定は、-ʃ と共起する否定（共起否定）と -ʃ のない ma: 否定とにさらに分けることができ、それぞれの統語的環境と意味を記述した。-ʃ のない ma: 否定は、主として不定名詞や ʃumrⁱ- 属格人称接尾辞、walʔa:h などと共起して全面的な否定を形成する。共起否定においては、2つの否定要素の間に動詞句や前置詞句などが入るものを述語否定形式、人称辞が入るものを人称否定形式と名付けた。la: 否定を作る la: は原則的に -ʃ と共起することはなく、主として文中の各要素に前置される反復的構文により全面的な否定を作る否定辞である。これらの記述を踏まえて、ma:- と -ʃ の2つの否定要素について論じ、これらは単一の接周辞とはいえず、それぞれが独立した形態素であると結論づけた。

「第5章 否定と文構造」では否定辞 ma:- に焦点を当てて論じた。述語否定形式の述語には、動詞屈折辞、属格人称接尾辞、対格人称接尾辞という人称要素が含まれる。これに対して、人称否定形式には人称辞が含まれる。それゆえ、共起否定の対象となる要素の共通性として人称表示を想定できる。ここで、人称否定形式の人称辞の形態が、他の人称接尾辞とは異なることから、これを主格人称接尾辞と名付けた。そして、この系列の人称接尾辞が現れる場合を概観し、これが談話モダリティに関わる3つの小辞、ha:-, rʔa:-, mʔa:- と共に現れる点から、この主格人称接尾辞と共起する否定辞 ma:- も談話モダリティ形式のひとつであると分析した。しかし、そのいっぽう、この

否定辞は動詞屈折辞，属格人称接尾辞，对格人称接尾辞という別の人称要素とも共起している。そこで，この言語のモダリティ形式を概観し，動詞屈折辞，属格人称接尾辞，对格人称接尾辞によってもモダリティを表示する形式があることを確認し，この否定辞がモダリティ表示形式に含まれうることを論じた。ここで，視点を人称要素に移し，これらの多様な人称要素がいかなる場合にモダリティ表示形式に組み込まれるのかを問題とし，この点を文構造という概念を導入することによって説明した。この言語のあらゆる文には，文頭に立つという述語位置条件を満たした述語が含まれるが，この述語は主題（明示されているか否かは問わない）と人称の点で一致するという主題人称表示条件を満たした主題人称表示述語と，この条件を満たさない名詞述語との2種に分けられる。述語によって形成されるモダリティ表示形式では，その述語は常に主題人称表示述語であり，したがって，モダリティ表示形式に付随する人称表示とは，主題の人称であると考えることができる。この主題人称表示述語と名詞述語という区別は，述語否定形式と人称否定形式との違いにも関わっている。すなわち前者は主題人称表示述語を述語とする文に，後者は名詞述語を述語とする文に現れ，相補分布関係にある。また，人称表示がないにも関わらず共起否定となる非典型的述語文（存在文など）については，これらの文で主題の人称を述語に一致させると統語構造上の矛盾が生じるためであると分析した。

述語は文の成立に関わる文構造レベルの存在であるが，述語自体はさまざまな要素に下位分類される。これら下位分類による文の区別を構文と呼び，文構造と構文の観点からこの言語の文の分類を行った。この分類のうち特に重要なのは，動詞文としてしばしば分類される構文（未来接辞文やアスペクト的 fi: 文）を，名詞述語文に含めたことであり，そうすることでこれらの構文が動詞文とは異なり人称否定形式をとるという不規則性が説明できることとなった。この文構造と構文という統語的階層の違いは否定辞 ma:- と la: の違いにも関連付けることができる。すなわち，常に述語に付着する ma:- が文構造的な否定であるのに対し，反復的用法の la: は，文中のいかなる要素の前に現れることのできる構文的な否定となる。主題人称表示述語となるの

は多くは動詞であるが、名詞や前置詞などの非動詞も含まれる。このような非動詞要素について従来は「動詞化」という品詞論的な観点から捉えられてきたが、第5章3節ではこれらの非動詞述語文を検討し、この動詞化説を退け、この現象を非動詞要素が主題人称表示述語となる「(主題人称表示) 述語化」という統語論的な観点から説明した。

「第6章 -jの機能」では、否定に関与するもうひとつの要素である -j を取り上げた。まず、この -j の機能についての先行研究をまとめ、これを虚辞として見なす見解や否定極性語と相補分布するとの主張を退けた。そこで、否定におけるこの接尾辞の機能を考える上で従来十分に関連付けられてこなかった否定環境以外での -j の用法も考慮に入れ、疑問詞の構成要素、随意的な疑問文標識、述語に接尾されて不確実な推量を表すなどの用法の記述を行った。そして、モダリティの観点からこれらの用法を検討し、この接尾辞が非現実 (irrealis) モダリティを表示することを明らかにした。そこで、この非現実モダリティが共起否定といかなる関係を持つかについて検討し、-jのない ma: 否定の表す否定が否定の現実性 (断定性・事実性) を表すことから、-j には ma:- による現実的否定を非現実的 (非断定的・非事実的) なものとする機能があると分析した。ついで、非現実モダリティ表示要素としての -j を通時的観点から論じた。接続法を含む法体系を失ったチュニス方言においては、この -j が補助的な接続法表示要素として発達したと考えられる。そこで、フスハーにおいて存在していた断定的否定と非断定的否定との体系的対立を保持するためにこの -j が否定に関与するようになり、これにより共起否定が発展したとする仮説を提出した。さらに、述語に接尾されるという点で文構造的な要素であるこの -j を手掛かりに、非述語であった副詞が述語と解釈されて文構造に組み込まれた現象を扱い、この言語における文構造という統語的階層の存在についての傍証とした。

「結論」では本研究全体の議論を振り返り諸成果をまとめた。さらにアラビア語方言研究と一般言語学研究との双方における今後の研究課題について述べた。